

『素顔』

✽✽

山頂から眺める景色が、彼の純真でけがれない心を呼び戻させた。この土地での記憶の数々が断片的に浮かんでは消える。もう戻って来ることはないと思っていた。そう感じる彼の心が一思いに彼の胸の奥底をぎゅっと締めつけていく。

どうして離れたがっていたのだろうか？

素朴な疑問が問うてくる。季節外れの紫陽花の香りが、背筋をとって足の裏からふわりと抜けていく。

彼は、見下ろす街並みに自分自身のあるべき姿を投影していた。一度目を瞑り、暗闇の中で呼吸をする。

頭のとっぺんから足のつま先まで神経を張り巡らせて現実世界に身を委ねようとする。

冷ややかな風が通り過ぎ、鳥の鳴き声が轟いた。

小さな足音がひとつふたつみつ、四つめと共に世界が動き始める。

「置いて行かないでよ」

セーラー服を着た女子高生の声が、遠くの方から聞こえた。

彼女の息づかいは、ほんの少しだけ乱れていた。

「誰も一緒に行こうとは言っていないよ」

彼は目を瞑ったまま彼女の声を感じ、彼女の耳に届くほどの音量を扱った。

一定の歩幅で近づいてきた彼女が彼の目元を見て言う。「アンタ意地悪だよね」

「昔から縛られるのが苦手なだけだよ」

すうっと目を開いた彼は彼女の足元に視線を送る。

「その靴下、可愛らしいね」

「いいでしょ」

一変、陽気さを取り戻した彼女は右足を上げた。

「ミュート・タートルズ」

「そんなに高く上げると下着が見えるよ」

女子高生は素早く地に足を付けた。「いやらしい人」

一瞬、含みのある表情が彼に宿った。「見せてきたのは君の方だ」

「別に見せようと思って見せたわけじゃないんだから見ないでよ」

「ミュータント・タートルズじゃなかったのが少しだけ寂しかった」

「タートルズの下着穿いてる女子高生なんてどこ探しても居ないに決まってるでしょ」
彼女は呆れているというよりもむしろ楽しんでいるように見える。

「アンタ馬鹿なの？」

「捉え方によれば馬鹿だし、捉え方によれば馬鹿じゃない」

彼は又、彼女の足元に視線を送った。

「でも一つだけ言えることは、ミュータント・タートルズじゃなかったのが寂しかった」

彼の言葉を受け流すように、近くに備えられているベンチに視線を移し、腰掛けようとする女子高生。音もなく座った。「アンタ、この街の人じゃないでしょう？」

彼は真実を伝えた。「俺はここで生まれ落ちたよ」

女子高生は自分の耳に届くほどの声を洩らした。

「匂いがちがうのに」

そして、彼の耳に届くほどの声を発した。

「じゃあどうしてそんなに大きな荷物を背負ってるの？」

「きょう、戻ってきたんだ」

「どこから？」

「シエラレオネ」

「どこそれ？」

「ファミリーマートみたいな国旗のところ」

「嘘でしょ？」

「嘘つく意味ある？」

「ないけど」

女子高生は、制服のカーディガンのポケットに両手を突っ込んだ。

「どれくらいぶりに戻ってきたの？」

「十年くらいかな？」

彼女は自分の年齢から十を引いた。「私、八歳じゃん」

「君が八歳の時まではここに居たよ」

「じゃあ私たち出会ってるかもね」

「もしかしたら」

「出会ってないかもしれないね」

「もしかしたら」

彼女はカーディガンのポケットから右手を抜き、座っているベンチの空いたスペースにポンポンと二度音を立てた。

「ここ座りなよ」

彼は無言のまま、背負っている大きな荷物を地面に下ろし、彼女の言葉通りに身体を扱った。

「案外、素直なところあるじゃん」と、女子高生が言った。

初めて出会ったとは思えない間合いで会話を弾ませる二人。ポンポンポンとスーパーボールみたいに弾む言葉が居心地の良さを表していた。

空は青くて、雲は白くて、草木は緑で佇んでいて、立派な根っこは誰にも見えないところから見守ってくれている。澄んだ空気が小鳥のさえずりをより一層輝かせて、季節によって開花する彩りが象徴性をもたらしてくれている。

彼らは、目に見える街並みを遥か遠くの存在として共有していた。

「ねえ、セックスしたことある？」と、女子高生が言った。

「初対面の相手に聞かない方が良いよ」

「初対面の相手だからこそ聞けるんですよ」

彼女の言葉は真っすぐで美しい。

「で、したことあるの？」

「興味あるんだ？」

「あるに決まってるでしょ」

彼女は、つづける。

「気持ちよかった？」

「まだ経験したことがないのか？」

彼は彼女の足元に目をやった。

経験済みでもミュータント・ニンジャ・タートルズは履き続けるに決まってるでしょ。という言葉を期待していた彼だったが、残念ながら女子高生から飛び出した言葉は彼の期待を遥かに上回るものだった。

「私はタートルズのメンバーじゃないと身体をゆるさないと決めているの。もちろん四人のうちの誰でもいいわけじゃないのよ？ そこには優先順位というものが存在する。まあ正直言って甲乙はつけがたいけれど、私も私なりに一人の女性として懸命に生き抜かなければならない身だから？そこは少なからず考えるわよね。最優先はもちろんリーダーのラファエロ、次にレオナルド、その次がドナテロで最後にミケランジェロ。理由は聞かないで。答える気、さらさらないから」

勢いのままましく立ってた女子高生が一息入れてから言った。

「まあ、そんなところかな？」

彼はしばらく考えた。

果たして、二足歩行の亀は速いのだろうか？それとも遅いのだろうか？

「何か言ってくれないと私のユーモアがユーモアじゃなくなってしまうんだけど」

「二足歩行の亀は速いのかな？それとも遅いのかな？」

彼は彼女に想いを伝える。

「速いに決まってるでしょ」

女子高生は即答する。

「じゃなきゃ懂れないし」

雲に隠れていたお日様が顔を覗かせた。

「そんなことよりも、セックスしたことあるのか聞いているの」

「あるよ」

と、彼は素直に答えた。

「気持ちよかった？」

と、彼女も素直に返した。

すぐに何かを発しようとした彼だったが、脳裏に何かが潜り込み、思いとどまった。言葉に詰まり、しばらくの間、記憶の世界に閉じこもる。なにも発言しない彼の思惑を察した女子高生は彼から目を逸らし、目の前に広がる街並みに焦点を合わせようとする。

見たくもない窮屈な街並みをぼんやり眺める彼女の脳裏には、一時間ほど前、初めて彼と出くわした衝撃が蘇っていた。

一目見た瞬間、今日に見えているすべての世界がとろけて歪んで刻まれて真逆さまにひっくり返ったとしても受け入れられるくらいの強度が彼女のこめかみ辺りを包み込んだ。女子高生は、こんな気持ちを抱いたのは生まれて初めてだった。今の今まで甘酸っぱいか初々しいとか青春とか好奇心とかそんな生ぬるい言葉を扱っていた自分が率直に恥ずかしいと思えた。

彼と出くわしてから三秒間くらい、彼女の魂はどこか遠くの世界に置いてきぼりにされているようだった。

風が鼻先を掠め我に返った彼女が真っ先に取った行動は、赤面していないか確かめるために両の手の平を自らの頬に当てることだった。半ば、自然の成り行きとして。

過去の記憶を遡る彼女は、横目で彼を窺った。顎のラインがうつくしいと感じた。思案する姿に好意を抱いた。すべてが美意識のなかにとろけてしまいそうだと思い込んでしまった。しかし、まじまじ見つめていると怪しまれるからと、勝手に決めつけて、すぐに見たくもない街並みに焦点を戻そうとする乙女心。

おもむろに彼が口をひらいた。「その気持ちいいは、個人的な快楽？ それとも空間的な快楽？ それとも、チヨウワ？」

「チヨウワ？」

「調べるに平和の和で調和」

彼の表情が一瞬、圧倒的な寂しさに包まれた。

「一体、どれなんだろうね？」

「そんなの私に聞かないでよ」

彼女は宙を跳めながら言った。

「知らないからわざわざ訊ねているんじゃない」

顔を覗かせていたお日様が又、雲に隠れてしまった。

「気持ちいいにも種類があるんだよ」

彼は短いとも長いとも言えない髪を掻き上げた。

「いずれ君にも分かる時が来るよ」

「なに大人ぶってんの」と、女子高生が言った。

「実際に君より大人だから仕方がない」

「じゃあ聞くけど」

彼女の通っている学校のチャイムが鳴る時間になった。

「大人と子供の境界線はどこにあるの？」

「イスラエル辺りにあるんじゃない？」

彼女は言葉を返さなかった。それは数秒だったかもしれないし、数時間だったかもしれない。その間に風が吹き、小鳥がさえずり、太陽が雲に隠れ、郵便ポストに二通の手紙が投函された。

「私、まだこの街から出たことないんだ」と、女子高生が言った。

「この街がすべてか」

「早く私もこの窮屈な街から抜け出したい」

何とも言えない表情を纏った彼が言う。「どうして？」

「知らないことを知りたいから」

「どうして？」

「知らないことを知って強くなりたいから」

「どうして？」

「だって」

女子高生は、言葉の価値をぷくりと膨らますように数秒の沈黙を扱った。

「知らないって怖いんだもん」

「知った方が怖くなることもあるよ」

彼は即座に言葉を紡いだ。

「それでも知りたいの？」

小さく肯く女子高生。

彼の脳裏には過去の記憶が目まぐるしく映り込んでいた。

「知らなくても良かったことなんて山ほどあるよ」

「セックスの気持ちよさとか？」

「それは知っておいた方がいい」

強い風が吹いたとき、そいつに導かれるように女子高生の頭が彼の左肩にちょこんと乗せられた。

彼は反応することなくその重みを静かに受け入れる。近くで様子を窺っていた小鳥が二羽、慌てて飛び去っていく。その後すぐに又強めの風が吹いた。そいつによって揺らめいた木の葉の群れがクスクス音を立てて笑っている。隠れていたお日様がいつの間にか現れて光を照らしにくれている。地面の下の根っこは相変わらず、そこに居てくれていた。

女子高生は彼の左肩から入り込んでくる温もりを、そいつを味わい続けている現実を、儼く受け取った。

もし万が一、身を委ね続けることを彼が拒んだのなら彼女は、強い風のせいにしようと思っていた。

「どうして帰ってきたの？」

と、女子高生が訊ねた。

「虫の知らせ」

と、彼が返した。

「意地悪」

と、彼女が囁いた。

彼は何も答えなかった。

「正直に答えて欲しかったのに」

彼は又、何も答えなかった。

「私、アンタに恋したかも」

彼女の口元から彼女のおもいが溢れる。

「明日にはそれが恋じゃないということを知るよ」

彼は、窮屈な街並みに何かを投影しながら言った。

「それは知らなくても良かったこと？」

「遅かれ早かれ皆、知ってしまうことだよ」

慌てて飛び去った小鳥が二羽、元の位置に戻ってきた。

「君は君の理想に恋をしているだけなんだよ」

過去の記憶が彼にこの言葉を吐き出させ、過去の記憶が彼の脳裏に色濃く浮かびあがっていく。

「昔そう言われたんだ」

彼は、無機質な言い方を選んだ。

「当時はよく分からなかったけど、今ならその言葉に含まれた意味が分かる気がする。なぜなら」

「自分が言う立場になったから」と、彼女が語気を強めながら言った。

「物分かりがいいね」

「つまんないの」

「現実世界はつまらないの連続だよ。だから人は理想を抱こうとする」

彼は彼女にではなく誰にでもない誰かに話しているようだった。

「そして、理想と現実の境目をあやふやにして自分を保つようになっていく。理想を描いているつもりでもそれが目の前の現実だったり、現実を見ているつもりでもそれが遙か遠くの理想だったりする。言葉に頼りすぎると言葉が浅はかに聞こえ始めるし、行動に頼りすぎ

ると行動が浅はかに見え始める。この世のなか、矛盾こそが真理なんだ」

すらすらと言葉を述べる彼はふと、左肩の重みを感じていた。そして、初対面の女子高生相手に何言ってるんだろう。と強く思った。偶然、山の麓で出くわしたミュータント・タートルズの靴下を履いている十歳以上も若い異性。偶然、山の麓で出くわした十歳以上も若いミュータント・タートルズの靴下を履いている異性。左肩から伝わる彼女の穢れのない純真な心が彼に安心感を抱かせたのだろうか？

胸の奥底に秘めていた本音がぼろんと零れていく。

「知らない人について行ったら駄目って教えられなかった？」と、彼が言った。

「別について行ってない。私が向かおうとした先に偶然アンタが居合わせただけ」

「さっき置いて行かないでよって言ったのは誰だったっけ？」

「どうして私はアンタの左肩に寄りかかっているの？」

彼は何も答えなかった。

すうっと彼の左肩から頭を離した女子高生は自分の力で身体を整えた。そして、人差し指で方角を示す。

「あそこの白い建物が私の通っている高校」

「あいにく、目が良くないんだ」

「大丈夫」

彼女は人差し指をゆっくり下ろした。

「目が良くて悪くてもここからじゃ見分けがつかないから」

彼は何も答えなかった。

「目が悪いなんて不便だね」と、女子高生が言った。

「目が悪いと思ったことは一度もないよ」

「さっき良くないって言ったじゃん」

「良くないって言っただけで悪いとは言っていない」

ひとつ、鼻で息を吐いた彼女は彼の透き通った瞳を想像しながら言った。

「郵便局の近くの学校、分かる？」

「それなら分かるよ」

「いつもそこに居るから今度私に会いに来てよ」

彼は、数秒後に言い放った。「機会があれば」

「絶対に来ないやつじゃん」

「そんなことないよ」

ふいに彼は空を眺めた。しばらくしてから言った。

「もうすぐ雨が降るから早く帰った方がいい」

「ありえないでしょ」

女子高生も空を眺めた。

「でも、そろそろ学校に戻らないと。午後からの授業は絶対に出不きやいけないからさ」

彼はまだ空を眺めたままだった。

「アンタ面白いから友達になろうよ」

女子高生はスマートフォンを差し出しながら言った。

「あいにく、持ってないんだ」

女子高生は地面に横たわる荷物を見ながら言う。

「そんなに大きな荷物、持ってるの？」

「昔から窮屈なのが苦手なんだ」

「せっかく出会ったのに？」

「別に出会ったわけじゃない。ただ君がついてきたただけだ」

「授業サボってまで来たのに？」

「サボっている途中に出くわしているからそれは辻褄を合わせただけに過ぎない」

「授業サボったのは、私の直感がここへ来いって言ったのよ」

女子高生は残念そうな表情を素直に見せていた。

「じゃあ、名前は？」

「知らない方がいいこともある」

「じゃあ私も教えない」

「別に聞きたいと思ってない」

「うるさい」

ベンチから立ち上がった彼女は背中を向けて小さな山を下りていく。ベンチに座ったままの彼は二三度、女子高生の後ろ姿を目で追ったが、彼女は一度も振り返ることなくそのまま姿を消した。

視界から女子高生の姿が完全に消えたとき、彼はポケットから携帯電話を取り出した。



翌日、彼は墓石の前で両手を合わせていた。

目を閉じてから優に一時間は超えている。永遠に眠る母親との対話に、現実世界の時間の価値を投影する必要なんてなかった。

彼の目から涙は流れていないものの、目を閉じている時間の長さが彼の心情を物語らせている。

『いつでも帰って来たらいいんだからね』と、母親が言った。

彼女が作ったお弁当を手を持つ彼は何も言わなかった。塩おむすびと玉子焼きと鶏のから揚げとキュウリとトマトがお弁当箱の中から二人の様子を窺っている。朝早く起きて作ってくれたんだぞ！ 返事くらいしろよ！ と、彼らの代表である塩おむすびが叫んだ。しかし、その声が彼の耳に届くことはなかった。

電車の扉が閉まるアナウンスが鳴り響く。母親は彼の目を見つめている。彼は母親の目を見つめ返すことができなかった。

「いつてらっしゃい」

と、母親が言った。

「いつでも帰って来たらいいんだからね」

当時十八歳の彼は小さく肯いた。

けれども、小さすぎて誰にも伝わらなかった。

扉が閉まり、発車の時刻がやってくる。そこでようやく彼は扉越しの母親を見つめることが出来た。小さく肯く母親の姿。小さく肯く十八歳の彼。目が合うふたり。伝えたかった想いが、彼の奥底から強く湧きあがる。けれども、言葉にすることが出来ない。

どうして？

恥ずかしかったから？

語彙力がなかったから？

トマトは逆から読んでもトマトだから？

……いつか、伝えよう。

彼の乗った電車が、ガタンゴトンと動き始めた。

*

母親との最後の記憶が、彼の脳裏に流れていた。愛情を注がれていた記憶が目を開き続ける彼の暗闇に灯されては移ろう。何不自由なく育て上げて貰ったと気が付いた瞬間、それこそが無償の愛であるということを知る。暗闇の波が渦を巻く。愛情の種類をはき違えていた不届き物のレッテルが彼の背中にべたりと貼り付けられた。しかし同時に、だからこそ無償の愛を無償の愛として受け入れる扉が開かれたのだろう。天使と悪魔はいつも同時に現れる。

長時間の暗闇が、本当の彼が暮らす終着地点まで彼を導いていく。

執着から解放されたとき、世界が横一線に見えた。そして、形にならない何かを追い求めつづけていた彼の背に多くの代償がのしかかっている真実を彼は掴み取っていた。

死と直面するような痛みを伴いながら彼を産み落とし、育て上げた存在がこの世界から姿を消した。

想いが、彼の胸を強く締め付けていく。喜びなのか、怒りなのか、哀しみなのか、楽しみなのか。その正体を暴いたところで産みの親が目の前に煌々と現れて両の手を握ってくれるわけではない。

彼は、現実と向かい合い、地に足を付けていた。

いつまでも元気だろう、と勝手に思い込んでいた。合わせる手に力が込められていく。その両手を額に当て、頭の中に眠る記憶の引き出しが開かれるのをただただ待ち望もうとする。ふうっと砂の香りが風に乗ってやってきた。感じた彼は、僅かに震える。ひとつ、ごくりと喉を揺らした彼は見えない境界線の厚さを噛みしめる。

こうして彼が彼の世界観に浸る間も、信号機は赤から青に移り変わり、八百屋の野菜は売りさばかれ、昇った太陽は音もなく沈もうとする。もちろんその刹那、息絶える者もあれば産声をあげる者もあっただろう。

彼はそっと目を開きながら言った。

「ごめんね。ありがとう」

動くはずのない墓石は、動くはずがなかった。

昨日出会ったばかりの女子高生の言葉が彼の脳裏に浮かぶ。

『早く私もこの窮屈な街から抜け出したい』

彼は墓石に右手を添え、母親の温もりを感じようとした。

墓石は、やっぱり冷たかった。

一步身を引いた彼は、添えられた彩りに視線を送る。もう一度手を合わし、その場から離れることを選択した。

しばらく、彼は外界との関係を遮断していた。生と死の境目に身を委ね、空白の時間を取り戻そうとでもするかのように宙を舞った。

自身が編み出した価値観に縛られ、没頭していた日常を、ようやく過去として認められる感覚までたどり着いた。得体の知れない熱がすうっと冷めていく。

この街を出るときもこの街を出てからも、その、湧きあがる熱を頼りに肉体を動かしてきた彼は、突き付けられた一つの真実によって抜け殻となった。

もう、素早く飛ぶ鳥の姿も、道端に咲く花の姿も、すれ違う人の姿も、自然の成り行きのまま佇む数々の姿も、彼の五感に影響を与えることができなかった。

彼の意識は現在、外界を必要としていない。一方で、彼の肉体は無意識ながらも現実世界の地に着いた二本の足を動かし続けている。坂道を下り、階段を上り、平坦な道のりを歩んでいく。時折、もう忘れかけていた記憶が彼の思考にふわりと語り掛ける。何の脈絡も持たない瞬間的な映像が、不自然に波打つ彼の起伏をより激しく蝕み、彼の世界に侵食する。

叫んでしまいたかった。

彼は、人目も気にせず大きな声で叫んでしまいたかった。けれども、知らぬ間に育んできた大きな理性が彼を包み込み、生まれ持った本能に蓋をする。

なに縮こまってんだよ！

何も知らなかった遥か昔の彼が、何かを知ってしまった現在の彼に真正面から立ち塞がろうとしていた。けれども、君と向き合うには遅すぎた……遅すぎたんだよ。と、立ち塞が

った彼の肩を軽く叩いて耳を塞いだ。

又、女子高生の言葉が彼の脳裏に浮かぶ。

『知らないことを知って強くなりたい』

彼は、当時十八歳になったばかりの彼に問いかけていた。

あの頃のお前も同じ考えに縛られていたのか？

返事は返って来なかった。もし返ってきたとしても当時の感覚からは程遠いものが脳裏を強く刺激しただけだろう。十年以上も前の感覚なんて時と共に尾ひれや背びれが付いて全くの別物として浮遊するだろう。それを、今の純正な感覚だと思い込み、手を伸ばし突き進むと、歪んだ道のりが待ち受けていて気が付いたら崖の上から真逆さまに落っこちている。

記憶なんてひとつも偉くないんだぞ！

ずっと昔に出くわしたアルゼンチン人の言葉が、彼の記憶の引き出しから引っこ抜かれた。今この瞬間までその言葉も、出会ったことも、中年の男性であったことすら忘れていたのに、この記憶が映し出されただけで彼のまつ毛の長さや眉毛の濃さまでくっきりと思い出している。美味しそうに食べていたフィッシュアンドチップスの衣の具合まで鮮明に浮かびあがり、舌の上に味わいを捧げてくれた。

平坦な道のりを歩く彼は、振り返っている。

今まで歩いてきた道のりが、確かに視界に入り込んでいた。

本当にこの道を歩いてきたのだろうか？

記憶の中だけにとどまる過去をほんのりと疑った。目に飛び込んできた木々が微笑んでいるようにみえる。彼はそれから数秒間、宙を眺めたままその場に立ち尽くした。ふと我に返り、答えを求める前に前を向く。すると、足元に一匹の猫がお腹を見せて寝転んでいるではないか。

いつの間に？

猫の存在に気が付いた彼はそこでようやく、外の世界に舞い戻ることにした。

「なあ」

ゆっくりとしゃがみこんだ彼が言う。

「元気か？」

猫は、何も答えなかった。

しばらく見つめていた彼が徐に口をひらいた。

「俺の居場所、どこにあるか知ってる？」

首輪が付いていない猫は、逃げ出そうとしなかった。

「あらゆるところを探し回ってみたんだけどさ、どうにもこうにも見つからないわけよ」
彼は、猫を見つめる。

「見つかるどころか、大切に失っちゃった」

猫は何も言わずに、彼にお腹を見せ続けていた。

「なあ、お前に居場所はあるのか？」

彼は右手で猫のお腹を撫でた。猫は警戒することなく、寝転びつづけている。それから彼は、頭を撫でて顎を撫でた。猫は四足歩行の状態になって尻尾を立てて喉を鳴らして彼の指先をぺろ舐めた。ざらざらした感触が彼の指先に刺激を加える。生まれてこのかた一度も猫を飼ったことがないのに彼は、妙な懐かしさを感じていた。

「人間界ではね、一足す一の正解は二なんだって」

聞こえているのかいないのか、何とも言えないくしゃつとした猫の表情が彼に安らぎを贈る。受け取った彼は、静かに微笑む。猫はまだ彼の指先をぺろ舐めている。ざらざらとした感触を味わう彼は、首輪が付いていない猫を羨ましそうに見つめている。

猫と彼の目が合う。

すべてにおいて意味にやんてにやいんだぞ。

猫ではない誰かの言葉が聴覚に届いた。

彼はその印象を追いかけてようとする。

意味を求めようとするからうまくいかにやいんだぞ。

指先から感じるざらざらが論してくる。それでも追い求めようとする彼を制するアイツの意思が指を鳴らして合図を送る。

すべてを知っているかのように、強い風が吹いた。
伴って、自然の音が鳴り響く。

猫は敏感な耳で音を手に入れ、その音に従ってあつという間に物陰に消えていった。その俊敏な動きは到底、人間には真似できないものだった。一瞬の動きを目に焼き付けた彼はあらためて猫と人間の違いを芯から感じる事ができた。

猫は、そのまま戻ってこなかった。

彼の指先からざらざらが消える。しばらくして、呟いた。

「二足す一が二でも三でも四でも五でも、なんでもいい世界なんだろうな」

立ち上がった彼は首輪のない猫が向かった方角に一礼して又、平坦な道のりを歩き始める。

三歩歩いたところでそっと、右手を首元に寄せた。



「今日はミュータント・タートルズじゃないんだね」と、彼が言った。

校門を跨いだ彼女が言葉を返す。「何でいるの？」

「機会があつたからきた」

「どんな機会？」

彼はその問いには答えず、もう一度足元に視線を送った。「毎日タートルズ履いているのか気になって仕方がなかった」

「タートルズは勝負の時だけに決まってるでしょ」

女子高生は、カーディガンのポケットに両手を突っ込んだまま軽く右足を上げた。

「そもそもアンタは何者なの？」

「それが分かったら苦労しないよ」

「だよね」と、彼女が囁いた。

依然、彼女が通う校舎は校舎としてそこに在り続けている。窓ガラス、階段、教室、校庭、黒板消し、椅子、机。彼らは定められた役割を定められた役割として素直に受け入れている。階段が粉々に割れることもなければ、窓ガラスが黒板に書かれた文字を消すこともない。

「君に居場所はあるのか？」

と、彼が訊ねた。

「あるわけじゃない」

と、女子高生が返した。

彼は静かに微笑んだ。彼女以外の女子高生たちが彼を一瞥して通り過ぎていく。ちらほらと男子高生の姿も見える。

「ここって昔、女子高じゃなかったっけ？」

「今年から共学になった」

彼女の瞳が上を向いた。

「私、女子高だからここに入ったのに」

彼らの目の前を男子高生が二人、通り過ぎようとしている。

「今となっては別にどうでもいいけどさ」

彼女の棘のある言葉を耳にした男子高生二人が目配せをしたように見えた。

「ホントはどうでもよくないけどさ」

男子高生二人がわずかに俯く。

肩身が狭くなったように見えた。

「こんな小さなことでいつまでもくよくよしてる自分が馬鹿みたいに思えてくる」

「でも、君にとってはとても大きなことなんだろう？」

「ねえ、どうして会いに来たの？」

「私に会いに来てって言ったから」と、彼がは伝えた。

「じゃあ会いに来ないでって言ったら一生会いに来てくれなかったの？」

彼は、何も答えなかった。

校門の前に佇む彼女の表情は、空よりも澄んでいる。

空には雲が浮かんでいた。

「もう分かんないよ」

「もう分かんなくてもいいんじゃないの？」

「嫌だ」

彼女は力強く言う。

「だって何が何だか分からないと苦しいから嫌い」

「じゃあさ」

彼は、彼女の力強さをそのまま受け入れる。

「何が何だか分かることなんてあるのかな？」

彼女は、『うるさい』という表情を見せた。
その息づかいは、浅かった。

「どうして女子高が良かったの？」と、彼が訊ねた。

「どうして男は何でもかんでも解決したがるの？」
と、彼女が返した。

「こっちはそんなこと一つも望んでいないのに」

「そういう風に出来ているんだよ」

朝が通り過ぎ、昼を迎え、もうすぐ夕方に名を変えようとしている。空の色合いが移ろっていく。下校する生徒たちは何一つ疑問を抱くことなく定められた場所へ帰っていく。

「歩こう」と、彼が言った。

いいよ。と言う前に彼女は歩き始めていた。

彼は、彼女から四歩遅れて足を動かすことになった。

*

彼と彼女は銀杏並木を歩いている。

「この間、本当に雨が降った」

先ほどよりも少し落ち着いたように聞こえる彼女の声色が彼に向かって放たれた。
「なんで分かったの？」

「雨が降る前の冷たい風を感じたから」

「今日は大きな荷物、背負ってないの？」

「実家に置いてきた」

「じゃあお父さんとお母さんに会ったの？」

彼女の世界から生まれた真つすぐな言葉が彼に届く。
彼女の世界では彼の父親も母親もまだこの世に存在している。

彼は彼女の繊細な世界を崩さないように、曖昧な返答を選んでみせた。空には、昨日とは違う雲が昨日と同じように漂っている。

「今までどこに行ったことある？」

と、女子高生が訊ねた。

「どこへでも行った」

と、彼が返した。

「東京は？」

「スクランブル交差点渡った？」

「冬の北海道は？」

「夏の沖縄は？」

「種子島は？」

「小笠原諸島は？」

「ねぶた祭りは？」

「上野のパンダは？」

彼は彼女が投げかけるすべての質問に肯いてみせた。

「海外は？」

「行ったよ。暮らしにはしていないけど、ほとんど回ったんじゃないかな」

「行って良かったと思う？」

「良かったこともあるし、良くなかったこともあるよ」

「どこの国が一番良かった？」

「それぞれに良いところも良くないところもある」

「一つに決めるならどこ？」

「決める必要がないから決めないかな」

「絶対に決めなきゃいけないとしたら？」

彼は彼女の慌ただしい間を遮った。「質問が多いね」

「興味があるからに決まってるでしょ」

勢いづいていた彼女の肩の力が抜けた。途端、身軽になった彼女から本音が零れる。

「ねえ、私のこと好き？」

彼は大胆な彼女を羨ましく思った。

急に怖くなった彼女は、彼が言葉を発する前に新たな言葉を吐きだしてしまった。

「地球ってホントに丸いのかな？」

彼らを見守る銀杏並木は絶頂期を過ぎ、黄色に色づいた葉があらかた、ゆらゆらと舞い落ち、地面に散っている。散らかして御免なさい。お掃除、ご苦労様です。どうもありがとう。と人間を労わる心遣いを忘れない彼らの言葉は、耳を澄ましている人間の元にしか届かない。

「丸くても三角でも四角でも、大して変わらないんじゃないかな？」

彼は地面に横たわる黄色い葉っぱを踏みつけながら言った。しかし彼は踏みつけている事実を知らない。

「そんな気がする」

「どうして断言しないの？」

「本能にも理性にも従いたくないんだ」

踏みつけられている銀杏の葉は決して、『いたい』とは言わなかった。

「よく分からないけど、やっぱりアンタは面白い」

寂しさで覆いつくされた人間の世界が牙を剥く。

しかし、誰一人としてその真実を掴み取るものは現れなかった。

「ひとつ訊ねてもいい？」と、彼が言った。

彼女は彼の目を見て肯いた。

「この間君は、知らないことを知って強くなりたいと言った」

彼は、ひとつ息を吸った。

「どうして強くなりたいの？」

「世界が平和になって欲しいから」

彼女の瞳は、丸かった。

「争いごとをなくして、皆が手を取り合って、安らぎが訪れればいいと思っている。その為には私自身が強くないとどうしようもできないと思った。今の私はこの狭い街しか知らない。だからもっともつと世界を広げて色んなことを知って色んなことが出来るようになりたい」

彼は彼女の言葉を受け入れた。

真っすぐに輝いた想いが、彼の経験に基づいた思惑を刺激する。

「それは大きな傷と向き合うことになるかもしれないし、大きな不安と向き合うことになるかもしれないよ？」

「そんなの受けて立ってやる」

空に漂う雲の色合いは一つだけではなかった。大きさもまちまちだった。それらを総じて、『雲』と名づけるには何だか勿体ないような気がした。

「もう一つだけ訊ねてもいい？」

彼女を見つめる彼が言った。

「これはとても大切なこと」

彼女は静かに肯いた。

「もう少し寒くなったらマフラーを巻くの？」

「当たり前でしょ。寒いんだから」

言葉を受け入れた彼は、彼女の太もも辺りに視線を移す。

「でもどうしてどれだけ寒くなっても……」

「そういう風に出来ているんだよ」

彼女は彼の言葉を遮り、彼の言葉を借りた。

「女子高生は、そういう風に出来ているんだよ」

彼らが言葉を交わしている間に、銀杏並木が視界から消えた。振り返らなければ、散り散りになる銀杏の葉を見つめることが出来なくなっていた。

「私、これから習い事があるから」

彼女は左手に見える脇道に向かって方向転換する。

彼女の動きを感じた彼は、その場に立ち止まる。

数歩歩いて、少し離れたところで彼女も立ち止まり彼に向かって言い放つ。

「私の習い事が何か気にならないの？」

「特に気にならないかな」

彼女は彼の言葉を受け流し、堂々と伝えた。「書道、八段、凄いでしょ」

「どうだろう」

彼は数メートル先の彼女の姿を見て言った。

「だってそれは自分から進んで習ったわけではないんでしょう？」

「当時小学一年生の私にそんな意思があると思う？」

「将来、書道家になりたいわけでもないんでしょう？」

「そんなの当たり前でしょ」

数メートルの距離が彼女の心持ちを軽くさせる。

「やりたいことなんて一つもないし、なりたいたいものだって一つもない」

「でも、世界が平和になればいいと思っているんでしょ？」

「できることなら何もしたくないよ」

彼女の瞳は透き通っている。

「でも人間として生まれたんだから人間の役割を全うするのが生き抜くってことじゃないのかな？」

彼女の想いが、彼の胸の奥底に居座る彼に手を伸ばす。

「ねえ、誰かを好きになったことある？」と、女子高生が言った。

彼の脳裏に幾つかの顔が瞬間的に現れて、消えた。

「ねえ、寂しいと好きの違いはなに？」

彼女の言葉が彼に強い衝撃を与える。

「文字数が違う」

咄嗟に答えた彼は、自分の言葉に思わず苦笑いを浮かべてしまった。

彼女は、まともな答えが返ってこないのを知っていたかのように言葉を紡いだ。

「また会いに来てくれる？」

「機会があれば」

彼女は右手を上げて去っていった。前回同様、一度も振り返ることはなかった。

彼は長い間、彼女の背中を見つめていた。彼女の姿が見えなくなってからも、その残像を見逃さないようにしばらく視線を外すことができなかった。

*

当時十八歳の彼は、この街から離れることだけを考えていた。

よく河川敷で空を見上げながら何を考えるわけでもなく何かを考えていた彼は、このまま空を眺めて生き抜くことが出来ればどれだけ幸せなのだろうか、という思いにたどり着いた。その、奥行きのある想いが強くなればなるほど、裏側に隠れる漠然とした虚しさが彼にのしかかろうとする。何かに不満があるわけではない。けれども、何かが強烈に縛り付けてくる。ここではないどこかへ、これではないなにかを、そこに答えがあるはずだ。彼は時間の許す限り、正体を導きだすようにどこまでも広がる空を眺めつづけた。太陽の輝き、雲の流れ、風の速さ、砂埃の行方。川の音に耳を傾け、鳥の群れを鑑賞する。感覚が、震える。空飛ぶ鳥を見て又、感覚が震える。もうこれだけでいいのに、と彼は切実に思った。でもそれだけでは許されない未来が待っていることを掴み、落胆し、深い溜息を吐きだす。河川敷に腰掛ける十八歳の彼は、地に着いた自らの足を見つめるたびに、わざとらしく空を見上げた。

『そんなの受けて立ってやる』

彼女が習い事へ向かった後、彼女の言葉に背中を押されるように彼は河川敷へ向かった。過去に味わった感性が彼女と重なり、彼に懐かしさを抱かせた。次に虚しさがやってきて、その次に羨ましさがやってきた。

河川敷にたどり着いた彼は、現在の彼が思い描く十八歳の自分自身と対話をしていた。何を考えるわけでもなく何かを考えていたあの頃は、今みたいに何かを考えなければならぬとは思っていなかった。その場に浮かび上がる漠然とした想いにのめり込み、意味を与えないまま時間と共に空間に寄り添った。今の自分はどうかんだ？ と彼は彼に問いたです。無理やり目標を決めて手順を決めて一心不乱に突き進まなければならないと勝手に決めつけている気がした。一度積み重ねた覚悟を崩すのがこれほど恐ろしいものだとは思わなかった。

『世界が平和になって欲しいから』

彼女の声が脳裏で響く。その声には、分厚い輪郭が宿っている。

『争いごとをなくして、皆が手を取り合って、安らぎが訪れればいいと思っている』

知れば知るほど知った気になって肝心なことをすっかり忘れていたみたいだ、と彼は思った。幼い頃に想いを馳せたこの河川敷の景色が彼の心の声を呼び覚まそうとする。ここでようやく帰ってきた実感が湧いてくる。帰ってきた場所に母親が存在しない実感も強く湧いてくる。電車の扉が閉まる。扉越しの母親の表情が浮かび上がってくる。あの時、何を伝えたかったのだろうか？ 彼の脳裏に不透明な言葉が幾つか現れたが、どれも分厚い輪郭を宿す前に消滅した。彼は、どこまでも広い空に女子高生の背中を思い浮かべる。小さいのに大きい背中。彼女にあの頃の自分を重ねているだけなのだろうか？

空に浮かぶ彼女の背中から声が聞こえてくる。

『ねえ、寂しいと好きの違いはなに？』

寂しいと好きの違いはなんだろう。今にも消え入りそうな彼の呟きが、彼の聴覚に細かく伝わる。彼にとって彼女の存在は憧れ以外の何ものでもなかった。知らないからこそ知らないでいられる。知ってしまったら知らないには戻れない。どれだけ巧みに魅せたとしても知らないふりまでが精一杯だ。空を見上げる彼は、彼女の背中を見つめている。このまま知らないを貫き通して欲しいと思う一方で、そうなることはない儚さに胸が締め付けられる。そして彼自身、居場所を求めて彷徨った感覚を掴み取り、根拠のない正義感に人生を費やした過去の言動を遡る。

それらはすべて寂しさに包まれた環境であった。そしてどれも自分の居場所に当てはまらないような気がした。そんな不透明な過去の心持ちが蘇り、そいつが彼に切なさを与え、母親の墓石に手を合わせた場面を思い出させ、女子高生のミュータント・ニンジャ・タートルズの靴下までたどり着かせた。

「一体、なにをさせられているのだろうか」

空に浮かぶ彼女の背中に向かって呟いた彼の言葉を、空飛ぶ小鳥と舞う風が受け取った。小鳥は風に乗ってより高く羽ばたき、一つの断片的な記憶を分け与える。

*

「実はね、こうして煙草を吸っていること、私以外の誰も知らないのよ」
年齢は五十代後半くらいだろうか？ 上質な気を纏う女性が続ける。

「旦那も子供も知らないの。かれこれ三十年以上、私は私だけの秘密を抱えて生きている。これって可笑しいと思う？ どれだけ親しい関係性になったとしても見せたくない姿であるのかもしれない……アナタは自分の素顔を知っているのかしら？」



女子高生は、窓際の席から校庭を眺めていた。
先に見える校門に焦点を合わせる。

教室では数学専門の教師が白いチョークを手に持ち、黒板に向かってすらすらと文字を並べていく。黒板に書かれた文字を当然のようにノートに書き留める者もあれば、必死になつて書き留める者もある。机の上に何も置かない者もあれば、教科書を盾に漫画を読んでいる者もある。女子高生は、ただただ窓の外を眺めていた。机の横に掛けられた彼女の鞆の中には、おととい買ったばかりのマフラーが納まっている。

またすぐに会いに来てくれるものだと思ひ込んでいた。彼女は、惜しむ。別れ際、次に会う約束をすればよかった。もつと質問すればよかった。習い事なんて行かなきゃよかった。アイツに会う方法、聞いておけばよかった。

待つことしかできないのがこんなにも辛いなんて知らなかった。という想いが彼女を襲う。あれから時は流れ、クリスマスを迎えた。サンタクロースはやって来たのに、彼はやって来なかった。年が明け、お正月を迎えた。お年玉はやって来たのに、彼はやって来なかった。

『もう少し寒くなったらマフラーを巻くの?』

彼の声が彼女の脳裏に響く。

『明日にはそれが恋じゃないということを知るよ』

彼の声が彼女の脳裏に響く。

『君は君の理想に恋をしているだけなんだよ』

事あるたび彼女は、思い浮かべてしまう。綺麗な夕焼けを見たときも、美味しい料理を食べたときも、道端に咲く花に彩りを感じたときも気が付いたとき彼女は、名前も知らない彼の姿に息を詰まらせてしまう。汚い夕焼けを見たときも、不味い料理を食べたときも、道端に転ぶ犬の糞を踏んづけたときも気が付いたとき彼女は、連絡先も知らない彼の姿を真つ先に思い浮かべてしまう。

女子高生は、ただただ窓の外を眺めている。

そして、遙か昔の残像に意識を注ぐ。

もう二度と会えないのかもしれない。ふとした時、漠然とした虚しさが彼女にのしかかるうとする。すぐに想いが伝えられないからこそ、伝えたい想いがひっきりなしに彼女の脳裏を埋め尽くす。何度も何度も同じ想いが頭の中に滞り、駆け巡る。早く吐き出してしまいた

いの吐き出す手段はどこにも見当たらない。彷徨う想いは、姿を変えて形を変えて彼女の肉体を浮遊しつづけている。もう一生会いたくない、と思いつつもあれば、会いたくて仕方がない、と思いつつももある。彼女のポケットに眠るスマートフォンのバイブレーションがブーと音を立てた。立て続けにブーブーと三度も音を立てた。彼女はポケットに手を伸ばさない。どうして伸ばしてくれないの？　とでも言わんばかりにスマートフォンのバイブレーションがブーブーと二度の追い打ちを掛けた。ポケットからの振動を受け取った彼女は、もしかしたらと夢を見てしまう。彼女の脳裏には、届くはずのない彼からの想いが映し出されている。

機会が芽生えた。今から会いに行くよ。

どうしてアイツに会いたいのだろうか？　と彼女は考える。好きだから？　名前も連絡先も知らないから？　会いたくても会えないから？　直感？　彼の佇まいに好意を抱いたから？　顎のラインがうつくしかったから？　自分の思い通りに行かないから？

校門に寄りかかる彼の残像が、彼女の瞳を捉える。そいつを真に受けた女子高生は、思い描く。残像の彼は、彼女が居座る校舎の三階の窓に視線を移す。彼女と彼の目が合う。小さく微笑んだ彼は軽やかなステップを踏み、校庭を駆けだし始める。その動きは身体全体で喜びを表しているようにみえた。彼が履いているスニーカーの色は白だった。もちろん、彼女好みだ。季節は春先、天候はにわか雨。校庭の真ん中に聳え立つ大きな木には桜の花びらが咲き乱れている。駆け回る彼に砂埃が舞い、彼の白色のスニーカーに色を塗る。

校庭を眺める彼女の思い描きが、度を越えていく。

にわか雨は、彼の喜びに拍車をかけてくれる。強い風が吹き、花びらが揺れる。空には幾種類もの雲が漂っているが、空一面は常に青色だ。桜の木が校庭の真ん中に聳え立っている。彼の履く白色のスニーカーが、白色ではなくなっていく。心の底から喜びを表している彼は滴る雨を全身で感じている。まるで雨粒みたいにしっとりとした表情が彼を包み込む。彼は、駆け回る。彼は、駆け巡る。ぐるぐると回り、舞う。踊る。彼は、華麗に舞う。風も雨も彼に負けたくないようだ。雲も木も彼に負けたくないようだ。花も何もかもが彼と同化することを心待ちにしている。彼は、自然のごく一部としてそいつを受け入れようとする。しとしとと雨に打たれる彼の指先から水滴が滴る。その水滴が地面に落ちる。吸いこまれる。芽が出る。すくすく伸びる。いずれ、花が咲く。色とりどりの花びらが彼の指先によって開花する。喜びが移ろい、彼の表情から色彩が消える。彼女は残像の彼の行方を追う。

彼の実態を知らない彼女の思い込みが彼をより一層、彼女の色合いに染めていく。そいつを美化とでも呼ぶのだろうか？

機会が芽生えた。今から会いに行くよ。

もしアイツに会えたらどうしたいのだろうか？ と彼女は考える。名前が知りたい？ 連絡先が知りたい？ その場で決めればいい？ 想いを伝えたい？ アイツがどう思っているのかを聞きたい？ 何がしたいの？ どうしたいの？

潜れば潜るほど、光から遠ざかっていく。そして、息が苦しくなってくる。けれども、潜り切った先に輝かしい何かが待っている気がする。

校庭の真ん中に聳え立つ桜の木の下で大きく手を振る彼の言葉が、彼女の聴覚に届く。

『君に居場所はあるのか？』

まぎれもない、彼の肉声だ。窓際の彼女は察する。肉体に漂う想いが、肉体を超えようとしていることを。何かが剥がれる音がする。窓際の椅子に座る彼女の肉体から想いが脱しようとしている。その音は、みしみしとも聞こえた。べりべりとも聞こえた。その姿は目には映らない。離脱。超越。想いが肉体から離脱する。肉体から想いが超越する。べりべりみしみし。彼女の内側だけで鳴り響いている。数学の授業は我関せず、何事もなく時が刻まれていく。数学の教師は我関せず、何事もなく黒板に文字を刻んでいく。教室の生徒は我関せず、各々の世界観で物事を推し進めていく。いずれ、音が止み、剥がれ終る。彼女の肉体はそのまま居座り、彼女の想いだけが桜の木の下へ向かい始める。その表情は、どこまでも淡い。教室の扉から外へ出るわけでもなく、律義に階段を使って一歩ずつ下りるわけでもない。彼女の想いは、彼が待つ桜の木の下まで一直線に向かう。窓をすり抜け、宙に浮かび、地に足を付けることなく、しとしとと雨が降り注いでいる。ここは彼女の描く世界観だ。彼女の思い付き一つでいかようにも曲げ、歪ませることが出来る。

彼女の想いが、残像の彼を捉える。彼は私の知りたいことをすべて知っているような気がした。一目見たとき、そう思う。だから彼女は訊ねてしまう。

ねえ、大人ってなに？

彼女はこの超越した空間が長く続かないことを心得ている。
だから、畳みかける。

知るってなに？

知らないってなに？

会いたいってなに？

会えないってなに？

好きってなに？

寂しいってなに？

生きるってなに？

死ぬってなに？

滴る彼は、わずかに口を動かした。

すべて人間が作ってしまったものだよ。

彼が履くスニーカーはもう白色ではなかった。

「ここ、大事だぞ！」

数学専門の教師が数段高い声を発した。彼女はその空間の変化を掴み取り、外の世界に意識を向ける。黒板いっぱいには並べられた文字が時間の経過を物語らせている。教壇に立つ教師が白いチョークを置き、赤いチョークに持ちかえる。幾つかの文字に丸印を付けていく。教室全体の濃度が色濃く浮かび上がり、先程までの彼女の世界観をより一層、突拍子のないものに仕立て上げた。

季節は冬、天候は晴れ。風は冷たくて、校庭には誰も居ない。校庭の真ん中には何も聳え立っていないくて、白色のスニーカーは白色のままだった。

聞き慣れたチャイムの音が鳴る。急いでノートを片付ける者もあれば、最後まで丁寧に黒板の文字を書き写す者もある。机の上にお弁当を出す者もあれば、盾にしていた教科書を仕舞い込み堂々と漫画を読む者もある。

女子高生は、ただただ窓の外を眺めていた。



紫陽花の香りを感じるたびにあなたを思い浮かべます。

彼がこの世に生まれ落ちたのは、紫陽花が香る季節だった。実家の筆筒の片隅に隠れるように置かれていた一枚の手紙は、切手まで貼ってあったのに郵便ポストへ投函されることがなかった。躊躇った理由は一体、何だったのだろうか？

河川敷のベンチに腰掛ける彼は、届くことのなかった手紙の一行目に目を通す。そして、母親の想いを蔑ろにしてまで自分を貫き通していた。と思い込んだ。その選択の数々が闇雲に襲い掛かってくる。どうしてこの街から離れたがっていたのだろうか？ どうして一度も帰らなかったのだろうか？ 一体、何を探していたのだろうか？ 彼は、大きく息を吸い込み、細々とした空気を感じ、その一粒一粒から違いを受け取ろうとする。身体に染み込んだ癖が自らを縛り付けてくる。今更考えたところで後戻りなんて出来ないんだ。邪な想いが横やりを入れてくる。現実を受け止めるしか出来ないんだ。本当に、そうなのか？

彼は一度、手に持つ手紙を伏せた。

一行目を味わった彼は、その続きに挑む勇気を持ち合わせていなかった。腹をくくって臨んだはずなのに心が焼けるように熱い。自業自得じゃん。と、眺める景色全体が一斉に押し返してくる。鳥も草木も花も風もせせらぎも皆、同じ表情をして彼を見つめている。唯一、舞う蝶々だけが独立し、彼の指先に止まり、励ましの言葉をささやく。否。もちろん、錯覚だ。居るはずのない蝶々を感じた彼は、この熱さを痛みと名づけた。思考が停止する。焦点が合わない。この手紙を読もうと決心するまでにどれだけの時間を費やしたと思っっているんだ、情けない。と彼は彼を憐れむ。空では雲が風に乗って流れている。逆らうことなく流れている。遠くに見える山々は風に乗らずにその場に佇んでいる。逆らうことなく佇んでいる。逆らうってなに？ 唐突に女子高生の声が彼の耳を通り抜ける。そんな言葉、彼女から聞いたことなんてないのに彼の耳の中を通り抜ける。通り抜けた気がする。つづけて、マフラーを巻いた女子高生の姿が彼の脳裏に浮かび上がり、とても大切な言葉を伝えようとしてくれる。

彼は、ポケットから携帯電話を取り出した。

暗闇の画面を見つめ、届くはずのない彼女からの連絡を夢見る。

一度始まってしまおうといつか終わりがやってくる。ならば初めから始まりを選ばない方が傷つかずに済むだろう。初めて女子高生に出くわした時、彼はそう思った。だから彼女の問いかけに応えなかった。経験とは、傷つかない方法を学ぶ手段なのだろうか？ しかし、

傷つかなければ経験することが出来ない。あいかわらず、彼の脳裏に矛盾がやってくる。

今、彼女が隣に居てくれたらどんな言葉を掛けてくれるだろうか？ 彼は足元を見つめる。履き古した黒色のスニーカーが見つめ返してくる。寂しいから会いたいのか？ 好きだから会いたいのか？ 背中を押して欲しいから会いたいのか？ 一度伏せた手紙は、伏せられたままずっと下を向いている。

母親との死別は、叔母からの連絡で知った。携帯電話が鳴って、安らかに眠ったよ。と告げられた。実家に戻った日、叔母と再会した。大きくなったね。と謳い文句のように伝えてくる叔母がひと回りもふた回りも小さくなっているような気がした。その日は叔母が夕食を作ってくれて二人で食卓を囲んだ。近況報告や叔母との思い出、懐かしい話や恥ずかしい話を経て、ようやく母親の話へたどり着いた。

息を引き取ってから連絡したのは、母親からのお願いだっただろう。確かな理由は叔母にも教えてくれなかったらしい。叔母の聞いた限り、今まで会いたいと口にすることはなかったし、そういった素振りを見せることもなかった。でも最期の最期に小さな声で、身長伸びたかなあ。と口にしたそう。

叔母の言葉を受け止めた瞬間、十数年という歳月の重みに目が眩んだ。丁度その時、彼女が作った鶏のから揚げが喉を通り抜ける場所だった。そして悟る。これからの人生、喉に鶏のから揚げが通るたびにこの衝撃を思い出すことになるのだろうか。

伏せられた手紙に力が込められる。「ごめんね」

ここ数週間、彼の思考は様々な刺激によって破綻していた。進むことも退くことも許されず、整える猶予を与えて貰えない。どこから整理すればいいのだろうか？ と考えたところ整理できる状態には程遠いため、目まぐるしく入れ替わり立ち替わる印象を無防備に傍観するしかできなかった。女子高生との記憶、母親との記憶、今までの記憶、これからの思考。そいつらが、我先に我先にと彼を襲う。想いが何層にも重なり、あることないことがひしめき合い、彼の心が渴いていく。今まで自分が信じてきたものはすべて間違っていたのだろうか？

目を閉じた彼は、伏せられた手紙をそのまま額に当てた。そして大きく鼻から息を吸って口から吐いた。そいつを二度、繰り返す。目を開き、額から手紙を離し、二つの目で手紙を見つめる。しばらく見つめる。遠くの方で小鳥が鳴く。感覚が、震える。風が吹く。草木がざわめく。彼の感覚が、震える。雲が浮かんでいる。せせらぎが聞こえてくる。想いが、込み上げてくる。日没まで後どのくらいだろうか？ と彼は考えさせられた。その後すぐに沈もうとする太陽に視線を移し、まだ空は明るい。と彼は彼に言い聞かせる。ふと、雲に隠れる太陽が肯いた気がした。でもそれはすぐに気がただけであることを彼は受け止める。暗闇なんて怖くない。と彼は彼に言い聞かせる。またもや太陽が肯いた気がした。その内に秘めた弱々しさから目を背けるようにひとつ、口元を歪ませた彼の元に象徴的な記憶が贈ら

れる。

*

喫茶店のスピーカーから聞き慣れない言葉が音楽に乗って流れている。カウンター席に座る彼は店内を見渡し、自分の存在がちっぽけであることを再確認する。ひとつ、落ち着きを取り戻した彼は目の前のカップに手を伸ばす。ブラックコーヒーを一口含み、舌の上に漂わせ、ごくりと喉を鳴らすと、ブラックコーヒーは跡形もなく消える。本当に一口分のブラックコーヒーを飲んだのだろうか？ と彼は疑問を抱くが、コーヒーカップに目をやると喉を通した分だけ減っていると思い込ませてくる。彼は、不思議な世界だ。と心の中で苦笑する。

しばらくして彼は視線を隣に移す。一つ飛ばした席に座る女性の横顔がうつくしいと感じた。眼鏡を掛け、黒い髪には緩やかなウェーブが掛かっており、手には文庫本が納まっている。どんな本を読んでいるのだろうか？ と彼は関心を抱いたが、カバーで包まれておりまるで、どうぞ想像してごらんさない。と言われているみたいで余計にそえられる。彼は隠されているという価値に没頭し、彼女の奥行きを身勝手に想像する。彼女の手元に置かれている灰皿には四本の吸い殻がお行儀よく並べられていた。

喫茶店のカウンター席に座る彼の意識が音楽に向けられる。先程の曲が終わり、新たな曲が流れていることを掴み取る。それから彼は音楽だけに意識を費やす。三曲分の音を一つも聞き逃すことなく聞き入れた。そして四曲目のイントロダクションが流れ始めたとき、彼の視界の左端に動きが見えた。カウンター席に座る彼女が本を伏せ、煙草に手を伸ばし、手際よく火をつける。彼は彼女の一連の動作を横目で窺い、好意を抱く。その好意を察したのか、どうなのかは分からないが、彼女はひとつ吸った煙草の煙を吐きだすと彼に焦点を合わせ、彼に向かって言葉を放つ。

「実はね、こうして煙草を吸っていること、私以外の誰も知らないのよ」
年齢は五十代後半くらいだろうか？ 上質な気を纏う女性が続ける。

「旦那も子供も知らないの。かれこれ三十年以上、私は私だけの秘密を抱えて生きている。これって可笑しいと思う？ どれだけ親しい関係性になっても見せたくない姿であるのかもしれない……アナタは自分の素顔を知っているのかしら？」

彼女と彼の目が合う。唐突に、吸いこまれてしまいうさだと感じた彼は、意思に反して視線を逸らしてしまう。斜め下を見つめて小さく首を傾げる。

二口目の煙草を吸った彼女が口を開く。「そんなの誰も知らないわよね」
彼は彼女に向かって初めて口を開く。「はい、よく分かりません」

この空間から人の気配が消えた。

しかし、スピーカー越しの音楽は音楽としてその場に在り続けている。

彼はつづける。「なに、読んでいるんですか？」

彼の言葉を受けた彼女は、伏せられた文庫本に視線を移す。「気になる？」

「はい、気になります」

彼女の右人差し指と中指の間に挟まれた煙草からは煙が立ち上っている。「どうして気になるの？」

彼の脳裏から言葉が失われる。次に吐き出す言葉が見つからない。この空間は今、静寂が支配している。

しかし、スピーカー越しの音楽は音楽としてその場に在り続けている。

「なんだかアナタはとても生きづらそうね」

スピーカーから聞こえてくる音が、彼の心を震え上がらせている。

「おんなじ」彼女は三口目を吸った。「今まで人を好きになったことは？」

彼の脳裏に幾つかの顔が瞬間的に現れて、消えた。

彼の脳裏には未だ、選ぶ言葉がひとつも浮かびあがらずにいた。

「アナタはアナタの理想に恋をしているだけなのよ」彼女がさらりと言いのける。「想いなんてそんなもの。あんまり考えすぎても、見つからないものは見つからないままよ」

彼の目の前には一口分を失ったブラックコーヒーがカップの中で漂っている。

「どこに居ても何をしていても拭い去れない想いがある」

彼はカップに伸ばそうとしていた手を止めた。「それ、分かるような気がします」

「そんな気がした」

彼女は小さく微笑んだ後、彼女の世界観に戻っていった。

数秒して彼はふと我に返り、気が付いたときには二口目のブラックコーヒーを飲み終えた後だった。彼の耳の中に再び、流れる音楽が聞こえ始める。その曲は今までの曲とは異なり、彼の耳の中にあるスイッチを押し、感性を色濃く刺激した。意識が深く音を探ろうとする。そいつに従って、肉体も動きを見せる。

「この曲、気になるの？」

隣から声が聞こえてくる。

彼は思う。気になる素振りを見せていたのだろうか？

「知ってるの？」と彼女が訊ねた。

「知りません」と彼が返す。

「アンダーザセიმサン」

彼は、彼女の言葉を繰り返す。「アンダーザセიმサン」

「とても素敵な曲よ、スコーピオンズのアンダーザセიმサン」

力強く言い放った彼女は煙草の火を消し、灰皿に置く。先に並んだ四本と同じように丁寧に横たわる。五本分の秘密が彼女の心に蓄えられたようだ。題名の知らない文庫本が彼女の鞆の中に納まる。立ち上がった彼女はコートを手に持ち、この空間を後にしようとする。

そして、彼の前を通り過ぎる辺りで口を開く。「今からどこへ行くか気になる？」

彼は、強がった。「特に気にならないです」

「公園のベンチで煙草を吸うのよ」

*

ベンチに腰掛ける彼は、彼の世界観に取り込まれていく。視界がぼやけ、脳裏に目を向ける。頭の中にはアンダーザセიმサンが流れており、それ以外の音は一切受け付けなかった。数秒の沈黙を経て、彼の瞳から涙が滴り始める。一滴、二滴、三滴、四滴。しかし、彼の表情は変わらない。どうして泣いているのだろうか？彼の涙に彼の感情が追い付いていないようだった。彼は一度、目を瞑る。大きな粒がぼとりと零れた。下まで落ちてそのまま地面に吸いこまれていった。彼の表情は一切変わらない。猫みたいになやにやーともせず、小鳥みたいになやんちゅんともせず、生まれ落ちたときみたいにおぎやおぎや喚くこともせず、涙だけがぼろんぼろんと零れ落ちていく。どこに居ても何をしていても拭い去れない想いがある。胸の奥底に届いた言葉が、今も彼の奥底で揺らめいている。そいつが、強がって強張っている彼の弱々しさにゆらゆら揺らめいて、和らげようとしてくれる。

今まで会わなかった。それと同じことじゃないか。と彼は彼に言い聞かせようとする。会わないと会えないは違うのよ。その違いをしっかりと胸に刻み込ませるのが私たちの役目。とすぐさま頬を伝う涙の声が聞こえてくる。それはとても残酷なことだけど、誰かがその役割を担わなければならない。実はね、私たち自身も涙を流しながら流れているのよ。と涙が言

う。そして、つづける。大丈夫、ほら、私たちを信頼しなさい。身を、委ねなさい。

彼は、景色全体に目を向ける。

そこには、景色全体があった。

その、一見誰もが知っている真実に彼はおもわず、目を見開いてしまう。鼻の穴がぴくぴくと小刻みに動き始める。眉間にしわが寄る。二三度、素早く瞬きをする。ぼろんぼろんと涙が零れ落ちる。会えるうちに会っておきなさい。会いたいうちに会っておきなさい。そいつを伝えるのも私たちの役目。と地面に吸いこまれていく涙の音が聞こえてくる。吸いこまれた涙はそのまま、見守る根っこにまで届いたようだ。不意に、アルゼンチン人との記憶が蘇る。美味しそうにフィッシュアンドチップスを食べた後、眉毛の濃い彼は満面の笑みでこう言い放った。「すべては思い通りにならないよな」

頭では分かっていたはずの言葉が、あらためて彼の奥底に突き刺さる。名前も知らないアルゼンチン人との記憶が、彼の背中をそっと支えてくれた。そいつはすぐに消え去ることなく、じわりと肉体に広がっていく。彼の口から嗚咽が漏れる。張り詰めていた心持ちがすうっと薄れていく。歪んだままの口から声が漏れる。鼻が吸られる。想いが、込み上げてくる。大丈夫、ほら、私たちを信頼しなさい。身を、委ねなさい。涙の音が彼に寄り添う。目を瞑る彼から大きな粒がぽとりと零れ落ちる。そのまま地面に吸いこまれて根っこにまで届く。ベンチに腰掛ける彼の肩が震える。何度も鼻を吸り、声が漏れていく。彼の耳の中に、彼の音が届く。今まで目を背けていた想いが、彼の根っこにまで柔らかく届く。彼の漏らす音が徐々に大きくなる。その度に、大丈夫だよ。と涙が寄り添ってくれる。感覚が、震える。彼は、嗚咽する。そして、ようやく気が付く。頭ではなく、心で気が付く。

電車の扉が閉まる音を聞いたあの時、本当は寂しいんだ。と伝えたかった。お弁当作ってくれて有難う。と伝えたかった。またすぐ会いに帰るね。と伝えたかったんだ。

気が付く、肩の力が抜ける、ありのままになる、分らない。分らないけど、今なら挑めるかもしれない。と彼は思い込んだ。今なら自分がとても弱々しくて情けなくて愚かであることを受け入れている。そうだ、そうなんだ。彼の手元に動きが見える。泣いてもいいんだ。愚かでもいいんだ。伏せた手紙が上を向く。強くなくてもいいんだ。弱々しくてもいいんだ。それが、自分自身なんだ。彼の目が、手紙を捉える。瞬間、崩れ落ちそうになる。

崩れ落ちてもいいんだよ。と、風に乗ってやってきた誰かの声が聞こえてくる。

彼はもう、笑うしかできなかった。



女子高生は、ミュータント・ニンジャ・タートルズの靴下を履いている。

聞きたくもない授業の内容は、もう聞こえてこなくなつた。聞きたくないと思つていたものがいざ聞こえてこなくなると、どうして耳を澄まし始めるのだろうか？ 教室には彼女一人だけで、他の同級生は卒業式までここへ来ないだろう。卒業すればもう会わない人がたくさんいて、皆がそれぞれの道を歩むだろう。進学する者もあれば、就職する者もある。この街から出ていく者もあれば、この街に居座る者もある。家業を継ぐ者もあれば、単身海の外へ挑む者もある。彼女は、不思議な気分陥つた。そして、いつものように校庭を眺める。

今朝目が覚めたとき彼女の直感が彼女に知らせを届けた。それは眠りの中で得たものなのかもしれないし、彼女が生まれ持った性質なのかもしれない。月の影響なのかもしれないし、街の空気なのかもしれない。なにはともあれ、互いに何かが影響し合い、彼女にミュータント・タートルズの靴下を履かせ、教室へ向かわせた真実だけが残された。

教室の前までたどり着いた彼女は、無機質な匂いを両手いっぱい嗅ぐ。扉は開いたままだった。窓は開いていないと感じた。なぜなら、風でカーテンがなびいていなかったから。誰も居ない教室、下級生は別の教室で授業を受けている。一年生の教室にはちらほら男子生徒の姿がみえるのだろう。彼女は窓際の席へと足を運ぶ。一步、二歩、三、四歩。着実に足を踏み入れる。

彼女はカーテンを開き、閉められた鍵を開け、窓を開いた。そして、座り慣れた椅子に腰かけ、教室全体をゆつくりと見渡す。黒板も椅子も机も白いチョークも赤いチョークも、いつもより穏やかそうに見えた。風が教室に入り込む。彼女の髪が揺れる。風を感じた彼女はふと、何やってんだらう。と思ひ込む。そして彼を想い、彼女自身を想う。

彼の前に居る時だけは、芽生える想いをそのまま口にすることが出来た。あれらは、まぎれもなく私の想いだ。と彼女は過去を振り返る。校庭には誰も居なくて、空には雲ひとつ居なくて、彼女は安心する。けれども、すぐさまどこかの教室から下級生の声がふわりと届いて、少し肩に力が入り込む。数秒して意識が真ん中に戻って又、窓の外を眺めると思ひのほか校庭が広いことを感じて鼻で笑う。そして、馬鹿みたい。と彼女は彼女に言い聞かせる。

彼は希望だ。と女子高生は思う。同時に、彼は絶望だ。と女子高生は思う。彼の姿を一目見た瞬間、彼女はとろけた。説明できない胸のざわめきが芽生え、時間と共に育まれていった。実際に、目と目を見て話した時間は限りなく少ないのに彼女は、その何千倍も何万倍もの時間、彼を考え、彼を想った。そしていつの間にか残像の彼が生みだされ、彼女の思い通りに彼は動いていった。彼女が想うのは、実像の彼？ それとも残像の彼？ それとも、チヨウワ？

校庭を眺める彼女は、心を保とうとする。残像の彼に色を塗り、思い描く。好みの季節を迎え、好みの天候を宿す。好みの服を着せ、好みの言動を乗せる。そうやって理想を描くことで彼女は彼女自身を制御しているのだろう。しかし彼女は無意識ながらも、こいつが表面上の華やかさであることに気が付いており又、独りではどうしようもできない類の葛藤であることも心得ていた。

彼女はふと校門辺りを見つめる。そして、残像の彼に想いを寄せようとした。瞬間、強い風が吹いた。彼女はおもわず、目を見開く。校門に寄り掛かる彼がこちらを向いている。背中には大きな荷物を背負っている。右手を上げた彼は彼女に視線を送る。

嘘でしょ、と彼女の口から言葉が漏れる。知らない間に立ち上がり、椅子が大きな音を立てた。その大きな音は彼女の耳に届くことなく、そのまま消えた。バタバタとした足音が轟く。彼女は教室の扉から外へ出て、律義に階段を下りていく。三階から二階へ、二階から一階へ、その足音は徐々に速くなっていく。廊下を渡り、校庭へ出る時、彼女に想いが襲い掛かる。あ、窓を閉めるの忘れてた。彼女が生みだす足音がその答えを示してくれる。今はそれどころではないじゃないか。彼女の口元がひとつだけ歪んだ。そして、校門に寄り掛かる彼の姿を捉える。彼と彼女の目が合う。想いが、込み上げる。彼の表情は一切変わらない。そいつが彼女の想いをより一層、込み上げさせる。大きくなる彼の姿、近づく彼の姿、名前も知らない彼の姿が今、彼女の目の前に現れる。

彼女は両の手で彼の胸の辺りを力いっぱい押した。
半歩後ろに下がった彼は、彼女の口元に目を向ける。

「とても寂しかった。名前も知らないし、連絡先も知らないし、待つのがこんなにも寂しいなんて思わなかった。頭の中でずっとアンタのこと考えちゃうし、ずっと同じこと考えちゃうし、アンタの言葉が頭から離れないし、好きなのか寂しいのか分かんないし、とても苦しかった」

彼女は自分が何を伝えたのか、よく分かっていなかった。

「……でも、とても美しかったよ」

彼女の丸い瞳が彼を捉える。

彼はその力強い瞳から生命を感じ取る。

「この街に帰ってきたのは、母親が死んだからなんだ」

彼は、想いを伝える。

すうっと肩の力が和らぐ。

「他に言うことはないの？」

彼は女子高生の足元に視線を移す。

「その靴下、可愛いね」

「当たり前でしょ」

沈黙が、風の音を集めてくる。

風の音が、沈黙を際立たせてくれる。

しかし、ふたりの耳に風の音なんて聞こえているわけがなかった。

「歩こう」と、彼女が言った。

彼が、いいよ。と伝える前に彼女は歩き始めていた。

彼は彼女の背中を見つめながら、大きな荷物を背負いながら、彼女を追う。

窓際のカーテンがゆらゆらゆらと揺らめいていた。



彼と彼女は墓石の前で両手を合わせていた。二人とも長い間、目を瞑っている。墓石には、白いアイリスの花と一通の手紙が添えられていた。彼は、届くことのなかった手紙の返事を、届くことがないのに書き上げた。

「お母さんのこと、愛してた？」と、女子高生が訊ねる。

「愛してもらってた」と、彼が返した。

目を閉じる二人は、暗闇を共にする。

「これからどうするの？」と、彼女が訊ねる。

「鶏のから揚げを食べに行く」

「もっともっと先のこと」

「鶏のから揚げを食べてから考えようと思う」彼は真実を伝える。「君は？」

「卒業する」

「もっともっと先のこと」

「この世から姿を消す」

白いアイリスの花が揺らめいたようにみえた。

「もっともっと前のこと」

「どうして気になるの？」

「分からない」

「なんでも知っているように見えるのに」

「なんでも知っていると思ひ込みただけだよ」

「どうして？」

「分からない」

近くで様子を窺っていた小鳥が二羽、慌てて飛び去っていく。

「この街は変わってなかった？」と、彼女が訊ねる。

「変わってなかったけど、変わった」

「なにそれ」

彼は、暗闇の中で震える。

「変わってなかったけど、変わったんだよ」

暗闇の中で、電車の扉が閉まる音がする。

「今、何を想っているの？」と、女子高生が訊ねた。

「鶏のから揚げのこと」と、彼が返した。

「お腹、空いてるの？」

「お腹はいっぱいだよ」

「じゃあどうして？」

「お腹がいっぱいでも鶏のから揚げを想うときがあるんだよ」

暗闇の中の彼女に、彼と初めて出くわした心持ちが蘇る。

「私はまだセックスの気持ちよさを知らない」

彼は何も答えなかった。

「だから私に教えてよ」

「どうして？」

「大人になれる気がするから」

「セックスでは大人にはなれないよ」

「じゃあどうしたら大人になれるの？」

彼は何も言わなかった。

「ねえ、大人ってなに？」と、彼女が訊ねる。

慌てて飛び去った小鳥が二羽、元の位置に戻ってきた。

「知るってなに？」

「知らないってなに？」

「会いたってなに？」

「会えないってなに？」

「好きってなに？」

「寂しいってなに？」

「生きるってなに？」

「死ぬってなに？」

辺り一面が静寂に包まれる。

彼女は目を開き、隣に視線を送る。

待ち望んだ言葉が、彼の口元から零れ落ちた。

「すべて人間が作ってしまったものだよ」

そう言い放った彼は目を開き、添えられた手紙に目を向ける。

白いアイリスの花が彼女に微笑みかける。

ひとつ喉を揺らした彼女は、彼に向けて言葉を口にする。

「ねえ、私の居場所はどこにあるの？」

空の向こう側に焦点を合わせる彼の人差し指が、彼の視線の先へと向けられた。

*

女子高生は、ただただ窓の外を眺めている。視線の先には梅の蕾が開花に向けて着々と準備を始めていた。誰も居ない教室、誰も居ない校庭。風がやってきて、彼女の髪を揺らす。そいつは彼女を優しく包みこみ、優れた匂いを捧げてくれる。

彼女の震える指先に、舞う蝶々が触れた。